

地理的移動が社会的ネットワークに及ぼす効果の研究

—— キャンベラにおける検証 ——

野 邊 政 雄

1 本稿の目的

産業化につれて、第2次産業と第3次産業は都市で発達し、そこで雇用を創出するので、人々は農村から都市へ移動し、都市人口が増加する。また、集積の利益を求めて、企業は関連する他の企業や政府機関のある特定の都市には集中するので、人々もそうした都市に集まる。その上、雇用者は企業の都合によって勤務地を頻繁に変更し、居住地を短期間で変わってゆくという生活を余儀なくされる。それから、西欧では人々は昇進のために別の企業にしばしば移るが、これに伴って他の都市に移動することも起こる。このように、産業社会では地理的移動が盛んである。

オーストラリアでも、地理的移動が盛んであることが報告されている。1986年5月31日から1987年5月30日までの間に、15歳以上の人々のうち15.9%がその国では住居を変えていた。キャンベラにおけるこの割合は更に高く、18.5%にも昇る。都市を越えた移動に限定すれば、キャンベラの移動率はオーストラリアの州都よりも著しく高い。上述の期間において、15歳以上の住民の6.5%がキャンベラへ他の場所から移動し、5.7%がキャンベラから他の場所へ移動した。比較のためにシドニーを取り上げれば、15歳以上の住民の1.8%がシドニーへ他の場所から移動し、2.1%がシドニーから他の場所へ移動したにすぎない (Australian Bureau of Statistics 1988)。

オーストラリアでは、地理的移動についてのいくつかの研究がこれまでに行われた。その大部分の研究は、2つの領域に集中している。その1つは、地理的移動の実勢の統計的研究である。つまり、地理的移動の量や方向、移動者の人口特性の研究である (例えば、Rowland 1979)。もう1つは、海外移民の定着過程の研究である (例えば、Zubrzycki 1964)。しかし、地理的移動をした一般のオーストリア人が新しい場所でどのように定着してゆくかの研究は、あまりない。筆者の知る限りでは、プライアーの研究 (Pryor 1980) があるにすぎない。本稿では、一般のオーストラリア人の地理的移動がその人の社会的ネットワークに及ぼす影響をキャンベラのデータによって検討する。

ここで、研究対象を限定したい。キャンベラ住民の地理的移動を2つに区分できる。1つは他州からキャンベラへの移動であり、もう1つはキャンベラ内での移動である。この区別は、地理的移動の効果の研究では、重要である。というのは、地理的移動の距離は、移動が社会関係に及ぼす影響の程度を左右すると考えられるからである。つまり、他州からキャンベラへの移動はその人の社会関係に大きな影響を及ぼすのに対し、その都市内での移動は社会関係にあまり影響を及ぼさないと考えられる。本稿では、他州からキャンベラへの移動が、社会的ネットワークへ及ぼす影響を考察する。

地理的移動には、いくつもの指標があるが、本稿では、①キャンベラでの居住期間、②出身地の2つの指標で地理的移動を捕らえる。そして、次の3点を研究課題とする。

(1) キャンベラ出身者と流入者は、社会的ネットワークでどのように相違しているか。そして、キャンベラでの居住期間が長くなるにつれて、流入者は社会的ネットワークをどのよ

うに変化させるか。

(2) 出身地の人口規模によって、流入者がキャンベラで組織する社会的ネットワークがどのように相違しているか。

(3) オーストラリア出身の流入者と外国出身の流入者では、キャンベラで組織する社会的ネットワークがどのように相違しているか。

さて、キャンベラのデータを分析することに次の利点があることを指摘しておきたい。前述のように、オーストラリアの中で、キャンベラでは都市を越えた地理的移動が非常に盛んである。だから、地理的移動が社会的ネットワークに及ぼす影響を検証するのに、キャンベラは適した都市であるといえる。

2 理論的考察

まず、地理的移動をした人々はどのように社会関係を変化させるかを考察する。地理的移動によって、移動者は前住地での社会関係を縮減・切断することを余儀なくされるけれど、一部のそうした社会関係を維持する。他方、転入した都市に居住するにつれて人々と知り合うので、その都市の内部で社会関係を徐々に取り結んでゆく。ただ、1人の人が他人との交際に費やすことのできる時間には限度があるので、社会関係は無制限には増大しない。地元出身者の社会関係がその限度である。そこで、居住期間が長くなるにつれて、移動者の社会的ネットワークのレベルは地元出身者のそれに段々近くなる (Zimmer 1955)。以上の議論から、次の2つの仮説を提起できる。

(仮説1) キャンベラ出身者は流入者よりもキャンベラ内で社会関係を組織しているのに対し、後者は前者よりもその都市の外で社会関係を組織している。キャンベラでの居住期間が長くなるにつれて、流入者はその都市内で社会関係を段々と取り結んでゆき、その都市の外での社会関係を縮減する。

(仮説2) キャンベラでの居住期間が長くなるにつれて、流入者の社会的ネットワークはキャンベラ出身者のそれに近づく。

ここで、以前の研究結果をそれぞれの社会関係ごとに整理しておく。まず、親族関係である。ジトダイ (Jitodai 1963)、グリックら (Gulick *et al.* 1962)、ベラルド (Berardo 1966) は、都市での居住期間が長くなると親族交際が頻繁になることを発見した。ジトダイによれば、そうした関係は、特に都市のホワイトカラー層にみられたという。これに対し、ウスイら (Usui *et al.* 1977) は、都市での居住期間は親族交際と関連しないことを示した。次に、近隣関係である。トーマー (Tomah 1967) は、都市での居住期間が長くなると近隣交際が頻繁になることを示した。グリックら (Gulick *et al.* 1962)、カサルダとジャノウイツ (Kasarda and Janowitz 1974)、ゲルソンら (Gerson *et al.* 1977) は、都市での居住期間が長くなると近隣関係が多くなると報告した。これに対し、ウスイら (Usui *et al.* 1977) は、都市での居住期間が近隣者との交際頻度と関連しないことを示した。友人関係については、次のような研究がある。トーマー (Tomah 1967) とウスイら (Usui *et al.* 1977) は、都市での居住期間が長くなると友人との交際頻度が増加することを示した。また、グリックら (Gulick *et al.* 1962) は、都市で長く住むほど、友人の割合が多くなることを示した。最後に職場仲間関係である。トーマー (Tomah 1967) は、都市での居住期間が長くなると職場仲間との交際が減少することを示した。このように、先行する多くの研究では、都市で長い期間居住するにつれて社会関係を徐々に形成・

強化してゆくという結果が得られた。しかし、これに反する結果も若干あった。

さて、ツィマー (Zimmer 1955) は地元出身者と流入者の社会参加を比較し、流入者の社会参加のレベルが地元出身者のそれと同じになるには5年が必要であると報告した。

次に、出身地の人口規模と流入者が転入した都市で組織する社会的ネットワークとの関連については、次のような議論ができる (Rank and Voss 1982, p.201; sui *et al.* 1977, p.338; Windham 1963, p.203; Zimmer 1955)。地域の人口規模の大きさによって、交際様式は異なっている。例えば、ウェルマンの「コミュニティ解放論」(Wellman 1979) やフィッシャーの「下位文化理論」(Fischer 1975; Fischer 1982) が提起するように、人口規模が大きい都市ほど友人関係は盛んであるが、親族関係や近隣関係は衰退している。人々は青少年期に居住する地域における交際の仕方を社会化によって習得する。転入した都市と同じくらいの人口規模の都市で青少年期をすごした人々は、転入後、以前の経験のおかげで転入した都市の交際様式を容易に習得でき、その都市で社会関係を取り結びやすい。これに対し、転入した都市とは異なった人口規模の地域出身の流入者はそうした経験を持っていないので、転入後、そこでの交際様式をなかなか身につけられない。そこで、そうした人々は適応上の困難に直面するから、転入した都市で社会的に孤立してしまう。この議論から、次の仮説を提起できる。

(仮説3) キャンベラと同じくらいの人口規模の都市出身の流入者は、それとは異なった人口規模の地域出身の流入者よりもキャンベラで社会関係を取り結んでいる。

しかし、従来の研究結果はこの仮説と一致しない。ジトダイ (Jitodai 1963) は、農村出身のホワイトカラーの流入者が都市出身の流入者よりも都市で頻繁に親族と交際していることを示した。だが、そうした出身地による違いは、転入直後の流入者にのみ見られ、流入後11年以上都市に居住するとそうした違いは消失するという。また、ベラルド (Berardo 1966) は、農場や小都市出身の都市流入者が頻繁な親族交際をしていると報告した。それから、ウスイラ (Usui *et al.* 1977) は、出身地の人口規模が親族、近隣者、友人との交際頻度と関連していると報告した。しかし、その関連の仕方は直線相関でなく、もっと複雑であった。そして、農村出身の流入者がすべての社会関係で孤立していることはなかった。このように、先行する研究結果は農村出身の流入者が社会関係で孤立しないことを示しており、仮説3と一致しない。

ところで、仮説3では人口規模が異なった地域では交際様式が相違するということを想定した。この想定代わりに、外国の交際様式は国内のそれと大きく相違すると想定すれば、次の議論をすることができる。新しい都市へ転入後、流入者はその都市の交際様式を習得しなければならない。国内の他の地域の交際様式はその都市の交際様式と共通点が多いから、国内の他の地域出身の流入者は新しい都市の交際様式を容易に習得できる。ところが、外国における交際様式はその都市の交際様式と非常に相違するから、外国出身の流入者が転入した都市の交際様式を習得するのは極めて困難である。また、外国出身の流入者が外国にいる人々との社会関係を維持することは甚だ難しいので、そうした社会関係を縮減・切断をせざるをえない。以上の議論から、次の仮説を提起できる。

(仮説4) 外国出身の流入者は、オーストラリア出身の流入者よりも社会関係を取り結んでいない。

3 調査対象の設定

キャンベラ(1986年現在、人口249,407人)は、タウンと呼ばれる4つの区域から成っている。それらは、中心部(旧市街)、ウォーデンとウェストン・クリーク、ベルコネン、タグラノンである。更に、ニューサウスウェールズ州のクィンビアンという都市(1986年現在、人口22,698人)がキャンベラの東にあり、キャンベラのベッドタウンとしての役割を果たしている。以後、キャンベラとクィンビアンを合わせてキャンベラと呼ぶ。

開発年代が異なるベルコネンとタグラノンをまず選び出した。更に、それぞれのタウンから、社会階層でやや対照的な2つの国勢調査の回収地区を捜した。そして、合計4つの国勢調査の回収地区を調査地域として選び出した。さて、調査当時のキャンベラでは、幼児のいる女性の社会的孤立が社会問題となっていたので、女性を調査することにした。更に、生産年齢にある人口に限定した。こうして、結婚が同棲関係にある55歳以下の女性を調査対象に据えた。各調査地域の住宅から、60%を無作為に抽出した。そして、調査員がこれらの住宅を1986年11月より1987年3月までの間に訪問し、面接調査を行った。しかし、ベルコネンの1つの調査地域では、条件に適合する女性があまりに少ないことが調査期間中に判明したので、悉皆調査を行った。なお、オーストラリアでは核家族が一般的であるので、調査対象条件に適合する女性が2名以上1つの住宅に居住している事例は、標本の中にはなかった。本稿で分析を行う有効標本数は、394である。

4 分析方法と調査項目

本稿における分析の独立変数は①「キャンベラ出身者」と「流入者」の区分、②居住期間、③出身地の人口規模、④流入者の出身地による区分である。これらは、次のように指標化する。まず、「キャンベラ出身者」とは13歳から19歳までの最も長い期間をキャンベラで過ごした人とし、これに該当しない人を「流入者」とする。次に、居住期間は、①3年未満、②3年以上6年未満、③6年以上11年未満、④11年以上に4分する。それから、「出身地」は、13歳から19歳までの最も長い期間を過ごした地域とする⁽¹⁾。そして、出身地を人口規模に従って、①都市(人口100,000人以上)、②小都市(人口20,000人以上99,999人以下)、③町村(人口19,999人以下)に3分する。これに従えば、キャンベラは都市に分類される。また、出身地によって流入者を、①オーストラリア出身の流入者、②外国出身の流入者に2分する⁽²⁾。

次に、従属変数は、社会関係数と社会関係を取り結ぶ相手が居住する場所である。回答者が「とりわけ親しいと思っている」、親族、近隣者、友人、及び職場仲間がそれぞれ何人ずつ次の各地域に居住しているかを質問した。

- ① 歩いて5分以内の地域(本稿では、「地域社会」と呼ぶ)。
- ② ①を除いたそれぞれのタウン内。つまり、ベルコネンの2つの調査地域の回答者にとってベルコネン、タグラノンの2つの調査地域の回答者にとってタグラノン(本稿では「タウン」と呼ぶ)。
- ③ ①と②以外のキャンベラないしクィンビアン(本稿では、「キャンベラ」と呼ぶ)。
- ④ ①②③以外のオーストラリア(本稿では、「オーストラリア」と呼ぶ)。

5 調査結果の提示

(1) キャンベラ出身者と流入者の比較

表1は、回答者をキャンベラ出身者と流入者との2分して、各種の社会関係数とその地理的分布を示している。同表から、両住民の間に2つの相違点があることを読み取れる。

表1 キャンベラの女性にみる社会的ネットワークの規模（キャンベラ出身者と流入者との比較）

	親族	近隣者	友人	職場仲間	合計
キャンベラ出身者 (109人)					
地域社会	0.39 (0.90)**	0.90 (1.36)**	————	0.26 (0.79)	1.53 (2.15)
タウン	1.94 (3.28)**	————	3.84 (4.69)*	1.41 (3.47)	7.18 (8.85)**
キャンベラ	4.34 (4.30)**	————	4.94 (7.37)*	2.20 (5.87)	11.50(12.78)**
オーストラリア	5.16 (6.92)**	————	2.56 (3.90)**	0.63 (1.97)*	8.35 (9.35)**
合計	11.82 (9.84)*	0.90 (1.36)**	11.33(12.08)	4.52 (9.98)	28.56(25.61)
流入者 (285人)					
地域社会	0.08 (0.41)**	1.41 (2.18)**	————	0.19 (0.70)	1.67 (2.40)
タウン	0.43 (1.20)**	————	2.87 (4.14)*	1.24 (2.33)	4.55 (5.37)**
キャンベラ	0.79 (2.08)**	————	3.00 (4.51)*	2.04 (4.55)	5.83 (7.70)**
オーストラリア	8.12(10.78)**	————	5.71(10.55)**	1.63 (7.82)*	15.46(20.74)**
合計	9.42(11.66)*	1.41 (2.18)**	11.58(14.29)	5.10(11.99)	27.51(27.07)

(注) 括弧内の数字は標準偏差。

両側検定で、平均の差の検定を行った。 ** p<.01, * p<.05

第一に、各種の社会関係の地理的分布に目を向ける。キャンベラ出身者が取り結ぶ社会関係の全般的な地理的分布を見ると、①キャンベラ、②タウン、③オーストラリア、④地域社会の順序で、社会関係数が低減していた。地域社会は社会関係を取り結ぶ場所としての重要性を喪失しているが、社会関係はその都市の内部に集中していた。これに対し、流入者の社会関係の全般的な地理的分布を見ると、①オーストラリア、②キャンベラ、③タウン、④地域社会の順序で、社会関係数が低減していた。このように、キャンベラの外に社会関係を取り結ぶ相手の大半が居住していた。第二に、流入者は、キャンベラ出身者よりも多くの近隣関係を組織していた。つまり、キャンベラ出身者には近隣者が0.90人いたのに対し、流入者にはそれが1.41人いた。

(2) キャンベラでの居住期間

流入者に分析を限定し、キャンベラでの居住期間が従属変数とどのように関連しているかを検討する。表2は、流入者をキャンベラでの居住期間によって、①3年未満の流入者、②3年以上6年未満の流入者、③6年以上11年未満の流入者、④11年以上の流入者に4分し、各種の社会関係数とその地理的分布を示している。

表2では、社会関係を取り結ぶ相手が居住する場所を、地域社会、タウン、キャンベラ、オーストラリアの4つに分けた。こうして社会関係数を算出すると複雑になって傾向を把握しにくいので、相手が居住する場所を、キャンベラ内(地域社会、タウン、キャンベラ)とキャンベラ外(オーストラリア)に2分することにした。そして、キャンベラ内における親族関係数、近隣関係数、友人関係数、職場仲間関係数、及びその都市の外における親族関係数、友人関係数、職場仲間関係数に社会関係数を集計し直した。居住期間によって流入者のキャンベラ内の社会関係数がどのように変化するかを図1に、その都市の外の社会関係数がどのように変化するかを図2に示す。

図1より、居住期間が長くなるにつれて、流入者はキャンベラ内で親族関係、近隣関係、友人関係を徐々に組織していることを読み取れる。例えば、キャンベラで3年未満の流入者にはその都市内に友人が3.50人いるが、3年以上6年未満の流入者には5.50人、6年以

表 2 流入者の平均社会関係数（キャンベラでの居住期間別）

親族	近隣者	友人	職場仲間	合計	
3年未満（58人）					
地域社会	0.02 (0.13)	0.78 (1.36)**	———	0.10 (0.49)	0.49 (1.60)**
タウン	0 (0)*	———	1.76 (2.84)	1.05 (1.79)	2.81 (3.71)*
キャンベラ	0.10 (0.36)**	———	1.74 (3.10)*	2.47 (6.00)	4.31 (7.18)
オーストラリア	5.57 (8.19)	———	10.50(17.23)**	5.24(15.90)**	24.31(32.58)**
合 計	8.69 (8.15)	0.78 (1.36)**	14.00(19.23)	8.86(21.23)	32.33(37.67)
3年以上6年未満の流入者（64人）					
地域社会	0 (0)	1.22 (1.70)**	———	0.31 (0.89)	1.53 (1.96)**
タウン	0.39 (1.08)*	———	2.92 (4.66)	1.45 (2.02)	4.77 (5.55)*
キャンベラ	0.44 (1.46)**	———	2.58 (4.54)*	1.98 (2.96)	5.00 (6.17)
オーストラリア	7.17 (8.75)	———	5.70 (8.65)**	1.08 (3.37)**	13.95(13.78)**
合 計	8.00 (8.75)	1.22 (1.70)**	11.20(14.06)	4.83 (6.91)	25.25(20.55)
6年以上11年未満の流入者（62人）					
地域社会	0.11 (0.58)	1.31 (2.01)**	———	0.61 (0.55)	1.58 (2.21)**
タウン	0.61 (1.68)*	———	2.98 (3.12)	0.94 (1.49)	4.53 (3.91)*
キャンベラ	0.61 (1.68)**	———	3.16 (5.02)*	2.32 (5.49)	6.23 (8.36)
オーストラリア	6.87 (8.51)	———	3.31 (4.75)**	0.65 (3.83)**	10.82(10.65)**
合 計	8.34 (9.90)	1.31 (2.01)**	9.45 (9.88)	4.07 (9.18)	23.16(17.93)
11年以上の流入者（101人）					
地域社会	0.14 (0.51)	1.95 (2.71)**	———	0.18 (0.95)	2.27 (2.96)**
タウン	0.59 (1.21)*	———	3.42 (4.84)	1.41 (3.09)	5.42 (6.54)*
キャンベラ	1.45 (2.89)**	———	3.88 (4.71)*	1.65 (3.74)	6.98 (8.33)
オーストラリア	9.22(14.01)	———	4.45 (8.20)**	0.51 (1.98)**	14.17(19.11)**
合 計	11.40(15.26)	1.95 (2.71)**	11.74(13.36)	3.74 (7.70)	28.83(27.94)

(注) 括弧内の数字は標準偏差。

4群間の差の検定は、1要因の分散分析に基づく。** $p < .01$, * $p < .05$ 。

上11年未満の流入者には6.15人、11年以上の流入者には7.30人いた。このように、居住期間が長くなるにつれて、キャンベラ内の友人関係数が増加した (F 値=8.92, $p < .05$)。このことは、キャンベラ内の親族関係数 (F 値=8.92, $p < .01$) や近隣関係数 (F 値=4.03, $p < .01$) についても見られる。

対照的に、居住期間が長くなるにつれて、流入者はキャンベラの外での友人関係数や職場仲間関係数を段々と減少させていることを、図2より読み取れる。例えば、キャンベラで3年未満居住している流入者にはその都市の外に友人が10.50人いるが、3年以上6年未満の流入者には5.70人、6年以上11年未満の流入者には3.37人、11年以上の流入者には4.46人いた。このように、居住期間が長くなるにつれて、キャンベラ外の友人関係数が減少する傾向があった (F 値=5.83, $p < .01$)。このことは、キャンベラの外の職場仲間関係数についても見られる (F 値=5.50, $p < .01$)。

ただし、キャンベラの外における親族関係数、その都市内における職場仲間関係数、社会関係総数は、居住期間の長短によって、あまり変化していない。例えば、キャンベラで3年未満の流入者にはその都市内に職場仲間が3.62人、3年以上6年未満の流入者には3.75人、6年以上11年未満の流入者には3.42人、11年以上の流入者には3.24人いた。このよ

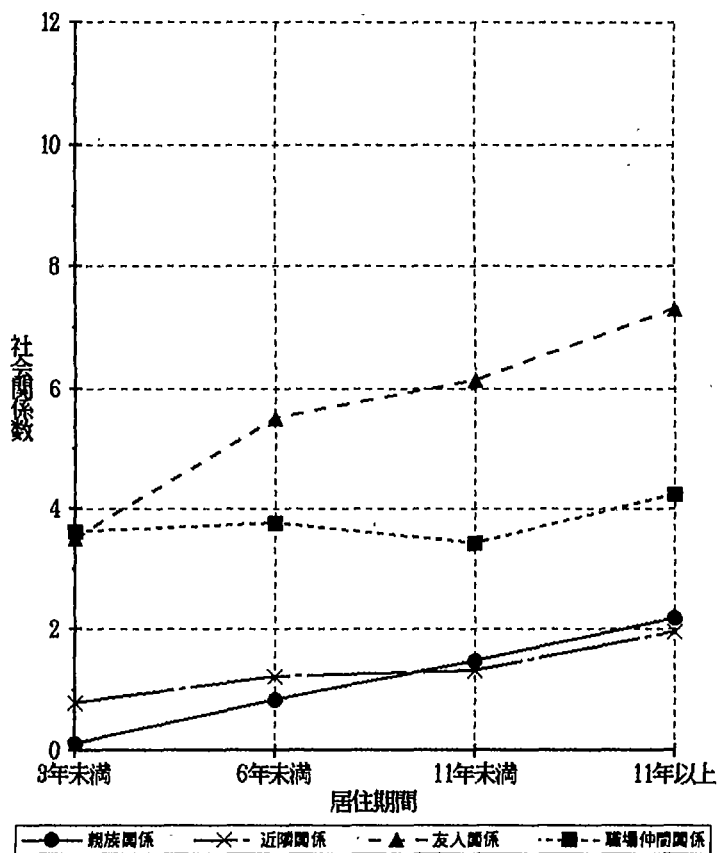


図1 居住期間によるキャンベラ内の各種社会関係数の変化

うに、居住期間が長くなっても、キャンベラ外の職場仲間関係数はあまり変わらない（F値=0.82, N.S.）。このことは、キャンベラの外における親族関係数についても同様である（F値=0.10, N.S.）。また、キャンベラで3年未満の流入者の社会関係総数32.33であるが、3年以上6年未満の流入者は25.25、6年以上11年未満の流入者は23.16、11年以上の流入者には28.83であった。社会関係総数は居住期間によって有意差はない（F値=1.38, N.S.）。

(3) キャンベラ出身者と長期居住流入者との比較

キャンベラ出身者とキャンベラに11年以上居住する流入者との比較を行う（表3）。これによれば、両住民は、キャンベラ内の友人関係数、その都市内とその外での職場仲間関係数、その都市内の友人関係数、及び社会関係総数で有意差がなかった。

しかし、両住民の間に次のような違いがあった。キャンベラ出身者はその都市に11年以上居住する流入者よりもキャンベラ内で多くの親族関係を組織していた。逆に、その都市に11年以上居住する流入者は、キャンベラ出身よりも近隣関係及びキャンベラ外の親族関係と友人関係を多く組織していた。

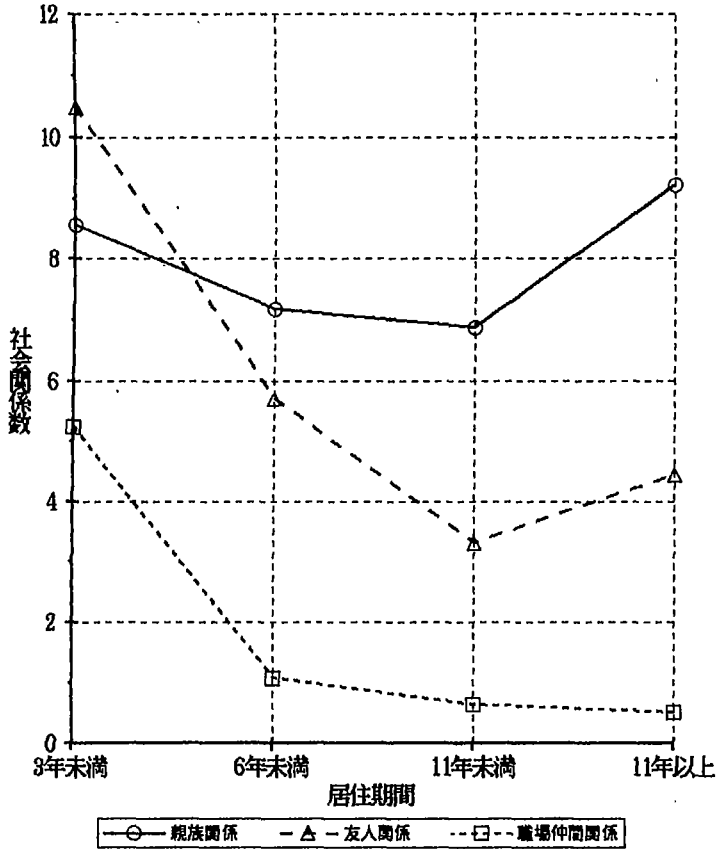


図 2 居住期間によるキャンベラ外の各種社会関係数の変化

(4) 出身地の人口規模

表 4 は、出身地の人口規模によって流入者を①都市出身の流入者、②小都市出身の流入者、③町村出身の流入者に 3 分し、各種の社会関係数とその地理的分布を示している。この表から、3 分された流入者は社会関係数とその地理的分布において有意差がないことが判る。

(5) 出身地

出身地によって流入者を、①オーストラリア出身の流入者、②外国出身の流入者に 2 分した。表 5 は、それぞれの流入者について、各種の社会関係数とその地理的分布を示している。同表から、両流入者の間に 2 つの相違点があることを読み取れる。第一に、オーストラリア出身の流入者は外国出身の流入者よりもキャンベラの外でより多くの親族関係を組織していた。つまり、前者には 9.34 人のそうした親族がいたのに対し、後者には 2.22 人がいたにすぎなかった。第二に、オーストラリア出身の流入者は外国出身の流入者よりも多くの近隣関係を取り結んでいた。つまり、前者には 1.51 人の近隣者がいたのに対し、後者には 0.92 人にすぎなかった。これらの差があるために、オーストラリア出身の流入者の社会関係総数 (29.09) は、外国出身の流入者のそれ (19.88) よりも低かった。これら以外の社会関係数では、両流入者の間に有意差が認められない。

表3 平均社会関係数（キャンベラ出身者と11年以上居住の流入者との比較）

	親族	近隣者	友人	職場仲間	合計
キャンベラ出身者（109人）					
地域社会	0.39 (0.90)*	0.89 (1.36)**	————	0.26 (0.79)	1.53 (2.15)*
タウン	1.94 (3.28)**	————	3.84 (4.69)	1.41 (3.47)	7.18 (8.85)
キャンベラ	4.34 (4.30)**	————	4.94 (7.37)	2.20 (5.87)	11.50(12.78)**
オーストラリア	5.16 (6.92)**	————	2.56 (3.90)*	0.63 (1.97)	8.35 (9.35)**
合計	11.82 (9.84)	0.89 (1.36)**	11.33(12.08)	4.52 (9.98)	28.56(25.61)
11年以上の流入者（101人）					
地域社会	0.14 (0.51)*	1.95 (2.71)**	————	0.18 (0.95)	2.27 (2.96)*
タウン	0.59 (1.21)**	————	3.42 (4.84)	1.41 (3.09)	5.42 (6.54)
キャンベラ	1.45 (2.89)**	————	3.88 (4.71)	1.65 (3.74)	6.98 (8.33)**
オーストラリア	9.22(14.01)**	————	4.45 (8.20)*	0.51 (1.98)	14.17(19.11)**
合計	11.40(15.26)	1.95 (2.71)**	11.74(13.36)	3.74 (7.70)	28.83(27.94)

(注) 括弧内の数字は標準偏差。

両側検定で、平均の差の検定を行った。** $P < .01$, * $P < .05$

表4 流入者の社会関係（出身地の人口規模別）

	親族	近隣者	友人	職場仲間	合計
都市出身の流入者（145人）					
地域社会	0.04 (0.22)	1.48 (2.41)	————	0.16 (0.72)	1.68 (2.66)
タウン	0.39 (1.09)	————	3.29 (4.75)	1.33 (2.63)	5.01 (6.18)
キャンベラ	0.69 (2.13)	————	3.30 (5.29)	1.95 (3.91)	5.94 (8.16)
オーストラリア	7.83(11.70)	————	6.50(10.50)	1.17 (4.32)	15.49(18.75)
合計	8.95(12.52)	1.48 (2.41)	13.08(15.61)	4.67 (8.96)	28.12(26.62)
小都市出身の流入者(111人)					
地域社会	0.14 (0.58)	1.38 (2.02)	————	0.24 (0.72)	1.76 (2.20)
タウン	0.56 (1.43)	————	2.60 (3.57)	1.18 (1.87)	4.34 (4.48)
キャンベラ	0.91 (2.03)	————	2.87 (3.69)	2.28 (5.62)	6.05 (7.83)
オーストラリア	8.71(10.34)	————	5.05(11.39)	2.52(11.47)	16.29(24.85)
合計	10.32(11.43)	1.38 (2.02)	10.52(13.45)	6.23(16.05)	28.44(30.08)
町村出身の流入者（29人）					
地域社会	0.07 (0.37)	1.14 (1.48)	————	0.14 (0.52)	1.35 (1.68)
タウン	0.14 (0.58)	————	1.83 (2.30)	1.04 (2.40)	3.00 (3.64)
キャンベラ	0.86 (2.03)	————	2.00 (2.70)	1.55 (2.53)	4.41 (4.06)
オーストラリア	7.28 (7.12)	————	4.31 (6.45)	0.52 (1.64)	12.10(10.68)
合計	8.35 (7.36)	1.14 (1.48)	8.14 (8.84)	3.24 (4.85)	20.86(13.53)

(注) 括弧内の数字は標準偏差。

3群間の差の検定は、1要因の分散分析に基づく。しかし、3群の差はいずれも有意でない。

表5 流入者の平均社会関係数（オーストラリア出身の流入者と外国出身の流入者の比較）

	親族	近隣者	友人	職場仲間	合計
オーストラリア出身の流入者 (236人)					
地域社会	0.08 (0.41)	1.51 (2.32)*	——	0.20 (0.72)	1.79 (2.54)*
タウン	0.38 (1.06)	——	2.77 (3.82)	1.31 (2.47)	4.46 (5.13)
キャンベラ	0.76 (2.05)	——	2.84 (4.35)	2.04 (4.84)	5.64 (7.80)
オーストラリア	9.34(11.34)**	——	6.02(11.17)	1.84 (8.52)	17.20(22.03)
合計	10.56(12.31)**	1.51 (2.32)*	11.63(14.51)	5.39(13.02)	29.09(28.43)**
外国出身の流入者 (49人)					
地域社会	0.08 (0.45)	0.92 (1.22)*	——	0.12 (0.63)	1.12 (1.42)*
タウン	0.67 (1.72)	——	3.39 (5.46)	0.92 (1.44)	4.98 (6.45)
キャンベラ	0.96 (2.21)	——	3.73 (5.21)	2.04 (2.73)	6.74 (7.22)
オーストラリア	2.22 (3.87)**	——	4.22 (6.70)	0.59 (2.42)	7.04 (8.93)**
合計	3.94 (5.09)**	0.92 (1.22)*	11.35(13.30)	3.67 (4.31)	19.88(17.54)**

(注) 括弧内の数字は標準偏差。

両側検定で、平均の差の検定を行った。 ** $p < .01$, * $p < .05$

6 結果の検討と結論

まず、仮説1を検討する。仮説1は、次のようであった。キャンベラ出身者は流入者よりもキャンベラ内で多くの社会関係を組織しているが、後者は前者よりもその都市の外で多くの社会関係を組織している。居住期間が長くなるにつれて、流入者はキャンベラ内で社会関係を結び結んでゆくが、その都市の外の社会関係を縮減してゆく。

分析結果(表1, 表2, 図1, 図2)は、全般的には、この仮説に合致していた。キャンベラ出身者は流入者よりも、キャンベラ内で多くの親族関係と友人関係を組織していたのに対し、後者は前者よりもその都市の外で多くの親族関係, 友人関係, 職場仲間関係を有していた。居住期間が長くなるにつれて、流入者はその都市内の親族関係と友人関係を増加させ、その都市の外の友人関係と職場仲間関係を減少させていた。

しかし、次の3点は仮説1に一致していなかった。第一に、キャンベラでの居住期間が長くなっても、流入者はその都市の外の親族関係を減少させなかった。親族関係は非常に強く情緒的に結び付いている、永続的な社会関係であるから、流入者がキャンベラに転入後も、地理的に離れた場所にいる親友との社会関係を維持したのであろう(Litwak 1960, pp.386-387; Litwak and Szelenyi 1969, pp.467-469; Ramu 1972)。このように遠方の親族との社会関係を維持できるのは、近年における交通手段(例えば、鉄道や自動車)や通信手段(例えば、電話)の発達のおかげである。第二に、流入者はキャンベラ出身者よりも多くの近隣関係を組織し、居住期間が長くなるにつれて、近隣関係数を増加させていた。この結果は、次のように解釈できる。住民が日常的にキャンベラ内で親族関係をあまり組織していないことは、前述の通りである。さて、洗濯物を干したり、庭の手入れをしたり、庭で遊んでいるときなどに、隣人と顔を合わせたりすることが、近隣関係にしばしば発展する。これに対し、ほとんど無制限の人々の中から自由に選び出して、主体的な努力によって友人関係を形成する。このように、近隣関係は友人関係よりも努力をしなくても結び結ぶことができる社会関係だから(鈴木 1976, pp.77-78)、住民は近隣関係を自らの裁量で増加しやすい。そこで、流入者は少ないキャンベラ内での親族関係や友人関係を多くの近隣関係を結び結ぶことで埋め合わせていたと、その結果を解釈できる。同様の知見は、筆者らの岡山市での調査でも得られた(野辺・田中 1995, p.225)。さて、ケラー

(Keller 1968, pp.33-34) は、近辺に親族がいないとき近隣関係や友人関係が登場してくるという「親族関係補完仮説」を提起した。ところが、キャンベラと岡山市での結果は、近隣関係による「親族・友人関係補完仮説」を示唆する。第三に、キャンベラ出身者は流入者とキャンベラ内での職場仲間関係数で差がなく、キャンベラでの居住期間が長くなっても、その数を増加させなかった。これは、就業者は職場仲間と平日定期的に会うので、流入者は職場仲間関係を短期間に形成できたからであろう。

次に、仮説2を検討する。仮説2は、次のようであった。キャンベラでの居住期間が長くなるにつれて、流入者の社会関係はキャンベラ出身者のそれに近づく。この仮説の検証のために、キャンベラ出身者の社会関係をキャンベラに11年以上居住する流入者のそれとを比較した(表3)。

分析結果によれば、次の2点で両住民の間に違いはなかった。第一に、流入者は非常に短期間にキャンベラ内で職場仲間関係をキャンベラ出身と同じくらい組織し、その都市の外での職場仲間関係を段々と縮減していたので、職場仲間関係で両者の間に有意差はなかった。第二に、居住期間が長くなるにつれて、流入者はキャンベラ内で友人関係を組織していたので、キャンベラ出身者とその都市に11年以上居住する流入者はその都市内の友人関係数では有意差がなかった。これらの結果は仮説2に一致する。

しかし、両住民の間に次の4点で違いがあった。第一に、キャンベラ出身者はその都市に11年以上居住する流入者よりもキャンベラ内で多くの親族関係を組織していた。この結果は、次のように説明できる。親族関係は生得的であるので、個人の努力によってキャンベラで親族関係をそれほど増加できない。だから、11年以上キャンベラに居住しても流入者はキャンベラ出身者ほど親族関係を形成できなかったと、その結果を説明できる。第二に、その都市に11年以上居住する流入者は、キャンベラ出身者よりもキャンベラの外で多くの親族関係を組織していた。前述のように、親族関係は非常に強く情緒的に結びついている社会関係だから、流入者がキャンベラに転入後もキャンベラの外での親族関係を維持したためであろう。第三に、キャンベラに11年以上居住する流入者はキャンベラ出身者よりもその都市内で多くの近隣関係を組織していた。前述のように、前者は少ないキャンベラ内での親族関係と友人関係を多くの近隣関係を結び結ぶことで補完していたと、それを解釈できる。第四に、キャンベラでの居住期間が長くなるにつれて、流入者はキャンベラの外での友人関係を縮減していたけれど、キャンベラに11年以上居住する流入者はキャンベラ出身者よりもその都市の外で多くの友人関係を組織していた。これは、地理的移動のために遠域に居住するようになった友人との社会関係のいくらかを、流入者は維持し続けることを示している。これらの結果は、仮説2に反する。

仮説1と仮説2の検討から、流入者は次のように社会関係を取り結んでゆくことが分かる。キャンベラで長く居住するにつれて、流入者はその都市内で各種の社会関係を取り結び、そうした人々の社会的ネットワークはキャンベラ出身者のそれに段々と近づくのではなかった。むしろ、それぞれの社会関係の特徴を生かして、流入者は社会関係を形成していた。つまり、親族関係や友人関係と比べて、近隣関係や職場仲間関係は自らの裁量で増加しやすいから、流入者はそうした社会関係を短期間で結び結び、社会的に適応していた。更に、キャンベラに長く居住するにつれて、流入者は近隣関係をキャンベラ出身者よりも多く結び結び、少ないキャンベラ内での親族関係と友人関係を埋め合わせていた。これに対し、キャンベラに居住するにつれて、流入者は親族関係や友人関係を時間をかけて徐々に組織していた。それと、親族関係は生得的なので、流入者が親族関係をキャンベラ内でキャンベラ出身ほどに増加させることはできなかった。さて、前述のように、ツィマー(Zimmer 1955)の流入者の社会参加のレベルが地元出身者のそれと同じようになるには

5年が必要であると報告した。ところが、11年以上キャンベラに居住しても、流入者の社会的ネットワークはキャンベラ出身者のそれと必ずしも同じにはならなかった。つまり、前者はキャンベラ内で親族関係を後者ほどには組織していなかったが、近隣関係及びその都市の外での親族関係と友人関係を後者よりも有していた。

仮説3を検討する。この仮説は、次のようであった。キャンベラと同じような人口規模の都市出身の流入者は、それとは異なる人口規模の地域の流入者よりもその都市で社会関係を取り結んでいる。キャンベラは都市に分類されるので、都市出身の流入者がその都市で最も社会関係を組織していると予想できる。

分析結果(表4)によれば、出身地の人口規模の大小によって、社会関係数で違いがなかったため、仮説3は支持されない。そこで、キャンベラに転入後、小都市や町村出身の流入者はキャンベラの交際様式を容易に習得できたので、都市出身の流入者と同じくらいその都市内で社会関係を取り結べたということになる。

ところで、キャンベラ調査では、出身地を13歳から19歳までの最も長い期間をすごした地域と定義し、人々が交際様式を習得するのはその年齢帯であると想定した。しかし、人々が交際様式を習得するのは13歳以前のもっと若い時期であるかもしれない。とすれば、出身地の人口規模が流入者の社会関係に及ぼす効果を本稿で検出できなかったのは、出身地の定義のためであるという批判が可能である。調査方法を改善し、出身地の人口規模が流入者の社会関係に及ぼす効果を研究することが今後要請される。

仮説4を吟味する。この仮説は、次のようであった。外国出身の流入者は、オーストラリア出身の流入者よりも社会関係を取り結んでいない。

分析結果(表5)によれば、仮説4に沿うように、次の2点で2種類の流入者の間に違いがあった。第一に、オーストラリア出身の流入者は、外国出身の流入者よりもキャンベラの外で多くの親族関係を組織していた。これは、外国出身の流入者は外国にいる親族との交際を維持することは難しいので、そうした社会関係を縮減・切断をせざるをえないからである、説明できる。第二に、オーストラリア出身の流入者は、外国出身の流入者よりも多くの近隣関係を組織していた。この結果は、次のように説明できる。近隣関係は地理的に限られた場所に住む人々から何人かを選択し、取り結ぶ社会関係である。外国出身の流入者はオーストラリアの生活様式を十分に習得しているわけではないから、キャンベラで自らと同じような生活様式の人々を地域社会で見つけるのは難しい。だから、外国出身の流入者は、オーストラリア出身の流入者よりも近隣関係数で少なかったであろう。これに対し、友人関係数では両流入者の間に違いがなかった。外国出身の流入者が地理的に限定されない、ほとんど無制限の人々の中から自らと同じような生活様式の人々を見つけ、友人関係を取り結ぶことはできるから、両流入者の間で友人関係数では差がなかったであろう。結局、上述の2点でオーストラリア出身の流入者は外国出身の流入者よりも多くの社会関係を取り結んでいたため、前者の社会関係総数は後者のそれよりも著しく多かった。

しかし、全般的には、オーストラリア出身の流入者と外国出身の流入者は社会関係でそれほど違いはなかった。つまり、キャンベラに転入後、外国出身の流入者はオーストラリア出身の流入者よりも近隣関係を取り結びにくかったが、これ以外の社会関係をキャンベラで組織するのにおいてはそうした困難はなかった。結局、仮説4は一部の社会関係のみ当てはまった。

以上の検討より、次のことが言える。まず、①キャンベラ出身者が流入者かということ、②流入者のキャンベラにおける居住期間、③流入者の出身地がオーストラリアか外国かということ、キャンベラ住民の社会的ネットワークを大きく規定していた。

最後に、分析結果の検討から得られた知見は、次の4点に要約できる。

(1) キャンベラの流入者は近隣関係や職場仲間関係を短期間で取り結んでいた。更に、キャンベラに長く居住するにつれて、流入者は近隣関係をキャンベラ出身者よりも多く結び、少ないキャンベラ内での社会関係を埋め合わせていた。これに対し、キャンベラに居住するにつれて、流入者は親族関係や友人関係を時間をかけて徐々に徐々に組織していた。それと、親族関係は生得的なので、流入者が親族関係をキャンベラ内でキャンベラ出身者ほどに増加させることはできなかった。

(2) その結果、11年以上キャンベラに居住しても、流入者はキャンベラ出身者の社会的ネットワークと必ずしも同じにならなかった。つまり、前者はキャンベラ内で親族関係を後者ほどには組織していなかったが、近隣関係及びその都市の外での親族関係と友人関係を後者よりも有していた。

(3) 出身地の人口規模の大小によって、流入者が取り結ぶ社会関係で違いがなかった。

(4) オーストラリア出身地の流入者は外国出身の流入者よりも近隣関係とキャンベラの外での親族関係を多く取り結んでいた。

注

(1) 流入者がキャンベラに転入した理由を表6に示す。この表から、回答者や配偶者の就業者の就業地が変更になったため、その都市に流入した回答者が多かったことが判る。

表6 流入者がキャンベラに転入した理由

流入理由	人数	%
回答者の就業地の変更	23	8.1
配偶者の就業地の変更	133	46.7
回答者が新しい仕事を得たため	32	11.2
配偶者が新しい仕事を得たため	29	10.2
回答者の勉強のため	6	2.1
配偶者の勉強のため	3	1.1
(両) 親について来た	12	4.2
親族のそばに住むため	15	5.3
友人のそばに住むため	3	1.1
結婚のため	9	3.2
その他の理由から	20	7.0
合計	285	7.0

(2) 回答者の出身地を表7で示す。この表から、外国が出身地であるとき、その多くがイギリスであることが判る。

表7 回答者の出身地

出身地	人数	%
オーストラリア		
キャンベラ・クィンビアン	109	27.7
ニュー・サウス・ウェールズ州	136	34.5
クィーンズランド州	26	6.6
南オーストラリア州	22	5.6
クスマニア州	6	1.5
ビクトリア州	37	9.4
西オーストラリア州	7	1.8
北部準州	2	0.5
外国		
イギリス	18	4.6
ニュージーランド	3	0.8
イタリア	1	0.3
ユーゴスラビア	3	0.8
ドイツ	2	0.6
オランダ	1	0.3
その他の国	21	5.3
合計	394	100

引用文献

- Australian Bureau of Statistics. 1988. *Internal Migration, Australia, Twelve Months Ended 31 May 1987*. Canberra: Australian Bureau of Statistics.
- Berardo, Felix M. 1966. "Kinship Interaction and Migrant Adaptation in an Aerospace-Related Community." *Journal of Marriage and the Family* 28(3): 296-304.
- Fischer, Claude S. 1975. "Toward a Subcultural Theory of Urbanism." *American Journal of Sociology* 80(6): 1319-1341.
- Fischer, Claude S. 1982. *To Dwell among Friends*. Chicago: University of Chicago Press.
- Gerson, Kathleen, C. Ann Stueve, and Claude S. Fischer. 1977. "Attachment to Place." Pp. 364-394 in *Networks and Places: Social Relations in the Urban Setting*, by Claude S. Fischer et al. New York: Free Press.
- Gulick, John, Charles E. Bowerman, and Kurt W. Back. 1962. "Newcomer Enculturation in the City: Attitude and Participation." Pp.315-358 in *Urban Growth Dynamics in a Regional Cluster of Cities*, edited by F. Stuart Chapin, Jr., and Shirley F. Weiss. New York: John Wiley and Sons.
- Jitodai, Ted T. 1963. "Migration and Kinship Contacts." *Pacific Sociological Review* 6(2): 49-55.
- Kasarda, John D., and Morris Janowitz. 1974. "Community Attachment in Mass Society." *American Sociological Review* 39(3): 328-339.
- Keller, Suzanne. 1968. *The Urban Neighborhood: A Sociological Perspective*. New York: Random House.
- Litwak, Eugene. 1960. "Geographical Mobility and Extended Family Cohesion." *American Sociological Review* 25(3): 385-394.

- Litwak, Eugene, and Ivan Szelenyi. 1969. "Primary Group Structure and their Functions: Kin, Neighbors, and Friends." *American Sociological Review* 34(4): 465-81.
- 野辺政雄・田中宏二. 1995. 「地方都市における既婚女性の社会的ネットワークの構造」『社会心理学研究』10(3): 217-227.
- Pryor, Robin J. 1980. "Belconnen: A Suburban New Town." Pp.97-117 in *Mobility and Community Change in Australia*, edited by I. H. Burnley, R.J. Pryor, and D. T. Rowland. St. Lucia: University of Queensland Press.
- Ramu, G. N. 1972. "Geographic Mobility, Kinship and the Family in South India." *Journal of Marriage and the Family* 34(1): 147-152
- Rank, Mark R. and Paul R. Voss. 1982. "Patterns of Rural Community Involvement: A Comparison of Residents and Recent Immigrants." *Rural Sociology* 47(2): 197-219.
- Rowland, D. T. 1979. *Internal Migration in Australia*. Canberra: Australian Bureau of Statistics.
- 鈴木 広. 1976. 「都市社会構造論序説」『現代社会学の成果と課題』九大社会学会, 70-85頁.
- Tomeh, Aida K. 1967. "Informal Participation in a Metropolitan Community." *Sociological Quarterly* 8(1): 85-102.
- Usui, Wayne M., Tzuen-jen Lei, and Edgar W. Butler. 1977. "Patterns of Social Participation of Rural and Urban Migrants to an Urban Area." *Sociology and Social Research* 61(3): 337-349.
- Wellman, Barry. 1979. "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers." *American Journal of Sociology* 84(5): 1201-1231.
- Windham, Gerald O. 1963. "Formal Participation of Migrant Housewives in an Urban Community." *Sociology and Social Research* 47(2): 201-209.
- Zimmer, Basil G. 1955. "Participation of Migrants in Urban Structures." *American Sociological Review* 20(2): 218-24.
- Zubrzycki, Jerzy. 1964. *Settlers of the Latrobe Valley: A Sociological Study of Immigrants in the Brown Coal Industry in Australia*. Canberra: The Australian National University.

(平成7年11月15日受理)